次期学習指導要領 教科別まとめ　　中学校 No.01

審議まとめ（2026年10月5日）を**中学校の先生向け**にまとめ直しました

中学校版

国語

次期学習指導要領で、どう変わる？

話す・書く・読むを「話や文章の機能」でつなぐ教科へ



10秒でいうと　3領域を「話や文章の機能」でつなぐ。知識は「運用しながら」「教養として」深める2面に

やさしく言うと

中学校も、話す・聞く、書く、読むを「話や文章の機能」（仮称）でつなぐ方向です。「思考力、判断力、表現力等」は、文章の種類と考え方をひとまとまりで示す案です。評価は、途中の見取り（形成的評価）を重くするとされています。教科書は、中心になる「基幹教材」と、調整できる「関連教材」を分けることが考えられています。

中学校はいつから？

全面実施	**2031年度（令和13年度）から（見込み）**
移行期間	2028～2030年度
告示	2026年度末の予定
教科書	2031年度から新しい教科書（2029年度に検定）

この冊子の中身

1 国語のポイント　4つ
2 主な変更点　9項目
3 現行と次期の比較（新旧対照）　4項目
4 授業時数
5 生成AI・ICTとの付き合い方　6項目
6 今からできる準備チェックリスト　7項目
7 次期を先取りする授業アイデア　1本
8 指導案（試案）　1本
9 現行の学習指導要領・解説（中学校）

無料　原田英語.com 次期学習指導要領ナビ

研修・会議・授業・保護者会での印刷・コピー・配布・投影はご自由にどうぞ。ご連絡は不要です。クレジットは残してください。
審議まとめ（2026年10月5日）準拠・出典ページつき。告示前の方向性で、今後変わることがあります。2026年11月4日 版

サイトで見る

国語の3行要約（全校種）

1. 話や文章が社会で果たす役割(「話や文章の機能」(仮称))を軸に、話す・聞く、書く、読むの学習を関連付けて計画できるよう内容を整理し直す方向。
2. 「知識及び技能」は「運用しながら深める」面と「教養として深める」面の2つに分け、漢字などの事項もまとめ直して精選する案。
3. 高校は必履修2科目の枠組みと単位数を保ったまま、選択科目を標準2科目(各8新単位)と発展4科目(各4新単位)に組み替える案(科目名は仮称)。

※高校の新科目名(現代の国語Ⅰ・Ⅱ、言語文化Ⅰ・Ⅱ、論説と批評ほか発展4科目)と「話や文章の機能」は仮称。

1 国語のポイント

4つ

1 文章の種類と考え方をひとまとまりに

今は、学習の過程ごとの細かい事項と、言語活動例が別々に書かれています。次期は、機能を軸に、文章の種類と働かせる考え方をまとめて示す方向です。たとえば「意見を述べる文章」と「主張を明確にする」「根拠を検討する」などを一括りにします。P134 P138

授業では、たとえば 意見文を書く単元で、主張・根拠・論理の展開をまとめて考えさせる。そうした単元づくりが、この方向に沿った例です。

2 学習の過程をそろえて、領域をつなぐ

今は、領域ごとに学習の過程の分け方が違います。次期は、話す・書くは「考えの形成／表現・推敲」にそろえる方向です。聞く・読むは「構造と内容の理解・解釈／考えの形成」にそろえます。過程が共通になり、領域をまたいで学んだことを使いやすくなります。P134

授業では、たとえば 読む単元で整理した「文章の構造の捉え方」を、次の書く単元の構成メモに生かす。こうした領域の往復が考えられます。

3 評価は途中の見取りを重く

短い単元ごとに最終評価まで行う実態が課題とされています。次期は、途中で学習の改善に生かす評価(形成的評価)を重くする考え方です。使いながら深める知識は、複数の単元を経てから総括する。教養として深める知識は、単元末や学期末にまとめて評価する例が示されています。P129 P142

授業では、たとえば 単元の途中は付箋やコメントで声かけを中心にし、思考・判断・表現の成績は、単元の成果として表れた姿でまとめて評価する。そんな形が一例です。

4 「基幹教材」と「関連教材」

教科書の中で、力を育てる中心の「基幹教材」をはっきりさせることが考えられています。あわせて、学校の状況で使い方を変えられる「関連教材」を位置付けます。時数を増減する場合は、必要な内容を保障したうえで関連教材の扱いを調整できるとしています。P139

授業では、たとえば 論理の展開が分かりやすい論説を基幹教材にし、構成の違う論説を関連教材として読み比べる。そんな使い方が考えられます。

2 主な変更点

9項目

1. 「話や文章の機能」（仮称）で3つの領域の学習をつなぐ

これまでは「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の学習がばらばらに意識されがちでした。次期は、話や文章が社会の中で果たす主な役割を「話や文章の機能」として整理し、その機能ごとに指導事項を並べる方向です。機能は「事実や知識の整理と理解」「考えや主張の理由付けと吟味」「思いや経験の表出と想像」「協働による考えの深化や合意」（いずれも仮称）などです。たとえば「論説を読む」「意見文を書く」「提案のスピーチをする」を、同じ「考えや主張の理由付けと吟味」の学習としてつないだ年間計画が立てやすくなります。P131 P134 P139

2. 「思考力、判断力、表現力等」の示し方を、文章の種類と考える要素の「ひとまとまり」に

今は学習過程ごとに細かく分けた事項と、話や文章の種類ごとの言語活動例が別々に書かれています。次期は「話や文章の機能」を軸に、扱う文章の種類と、そこで働かせる考え方をまとめて一つの事項として示す方向です。例として「書くこと」では、「意見を述べる文章」と「主張を明確にする」「根拠を検討する」などを一括りにします。学習過程も簡単になり、話す・書くは「考えの形成／表現・推敲」、聞く・読むは「構造と内容の理解・解釈／考えの形成」にそろえる方向です。P134 P138

3. 「知識及び技能」を「運用しながら深める」と「教養として深める」の2つに整理

言葉の知識を、使う場面がはっきりするよう2つの面に分ける案です。(1)運用しながら深める事項は、文章の構造や表現の仕方など、話す・書く・読む中で使って身に付けるものです。(2)教養として深める事項は、言葉のきまり、古典、書写、読書などを、その意味や価値と結び付けて理解するものです。事項は「事項のまとまり」に分けて示し、たとえば今は別々の「漢字の読みと書き」と「漢字の偏やつくり、由来や特質」を一つにまとめるとしています。P131 P135 P138

4. 評価のやり方の整理（形成的評価を重く、まとめの評価は後で）

短い単元ごとに最終評価まで行おうとして、途中の見取りや声かけがしにくい、単元後に知識だけのペーパーテストで評価する、といった実態が課題とされています。次期は、学習の途中では形成的評価（学習の改善に生かす評価）を行い、単元の成果として力が総合的に発揮されているかで総括的評価をする、という考え方を示します。運用しながら深める知識は複数の単元を経てから、教養として深める知識は単元末や学期末などにまとめて評価することが考えられるとしています。P129 P142

5. 生成AIの使い方とローマ字入力の扱い

生成AIを含むICTは、授業のねらいに合うときに使うのが原則で、AIが出した答えも比べて吟味する対象とします。要約する、最初の考えを書く、文章の構成を考えるなど、その単元で育てたい力に直結する場面では、AIを不用意に使わないよう慎重になるべきだとしています。評価では、集めた情報の信頼性や妥当性を確かめて自分で考え表現できているかを、より重視します。ローマ字の学習は今どおり小学校3年の国語で行い、ローマ字入力のタイピングは「総合的な学習の時間・情報の領域」が中心に担う方向です。P129 P140

6. 教科書の教材を「基幹教材」と「関連教材」に分ける

教科書の中で、力を育てる中心になる「基幹教材」と、学校や子どもの状況に合わせて使い方を変えられる「関連教材」をはっきりさせることが考えられています。同じ「話や文章の機能」に関わる教材をまとめて扱い、重なりを減らして教科書の内容を精選することが考えられています。調整授業時数で時数を増減する場合や高校で単位数を増減する場合は、必要な内容を保障したうえで関連教材の使い方を調整することで対応できるとしています。P139

7. 情報の扱い方・語彙・読書・古典の学習をさらに改善

情報の扱い方は、「情報どうしの関係を整理する力」と「情報の信頼性や妥当性を見極める力」という性質の違う2つの力を、学年に応じて系統的に示す方向です。語彙は、文脈の中で言葉を使って語感を磨く学習と、言葉の意味や関係を理解して語彙を増やす学習を両方進めます。読書は、きっかけづくりと、自分から読む読書へ移るための学習を充実させ、学校図書館との連携も進めます。高校の古典は、文語文法と口語訳に偏った指導を見直し、小中との接続や言語文化への理解を深める学習を重視するとしています。P136

8. 小 中 書写：手で書く指導を引き続き重視

タイピングなどで文字を入力する機会が増えても、小中学校での書写の指導は引き続き重視し、特に小学校では手書きの丁寧な指導を進めます。字を書くことに困難がある子には、デジタルの活用や代わりの方法を積極的に用意することを明確にします。評価では、書写で見る「文字を整えて書く力」と、ほかの学習で表現の手段として書く文字とを区別し、何を評価するのかをはっきりさせる方向です。P141

9. 小 中 柔軟な教育課程：調整授業時数・学年をまたぐ指導

国語も「調整授業時数制度」の対象教科です。生み出した「裁量的な時間」の例として、総合的な学習の時間での方言の探究、辞書を使った語彙の指導、ビブリオバトル（書評合戦）や読書会、演劇や文芸創作のプログラム、国語の単元づくりの研究・研修などが挙がっています。また学年ごとの区分は残しつつ、指導の時期を前倒し・後ろ倒しすることを認め、まとまった時間で学び直しをしやすくする方向です。P141 P142

3 現行と次期の比較（新旧対照）

4項目

黄色のマーカー＝次期で新しく入る・強く打ち出される言葉　~~取り消し線~~＝現行から消える・言い方が変わる言葉

項目	現行	次期（審議まとめの方向）
国語の「見方・考え方」	「言葉による見方・考え方」として、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味・働き・使い方などに着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること。	「様々な事象を表す**自他の言葉**を」、その意味や働き、使い方に着目して吟味し、「**多様な立場や考えを理解して**、**よりよく伝え合おうとする**こと」と、より短く示す（案）。P132
「思考力、判断力、表現力等」の学習過程	領域ごとに学習過程が違い、細かく分かれている（例：「読むこと」は「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」など）。	領域どうしでそろえる。話す・書く＝「**考えの形成**／**表現・推敲**」、聞く・読む＝「**構造と内容の理解・解釈**／**考えの形成**」、話し合う＝「**考えの形成**」。P129 P134
言語活動例・指導事項の示し方	学習過程ごとに細分化した事項と、3領域別・話や文章の種類別の言語活動例を別々に示している。	「**話や文章の機能**」（仮称）を軸に、扱う話や文章の種類と、思考・判断・表現の要素を一体にした「**一括りの事項**」として示す。P129 P134 P138
「知識及び技能」の示し方	個々の事項が独立して並ぶ（例：「漢字の読みと書き」と「漢字の偏やつくり、由来や特質」が別の内容）。どの知識を活用重視にし、どれを取り立てて学ぶのかが明確でない。	「（1）**運用しながら深める**事項」と「（2）**教養として深める**事項」に分け、「**事項のまとまり**」で構造的に示す。漢字の読み書きと漢字の構成などは一つの事項に統合。P129 P135 P138

4 授業時数

小中の国語の標準授業時数の具体的な数字は示されていない。総論では、新教科・領域の時数を確保するため、小学校3年以上で現在35コマ以下のものを除く教科等から一律3～4%程度を「広く薄く」減らす考え方が示され、実数は今後検討とされている（P79）。国語の節でも内容の充実は「総授業時数を増加させないことが前提」（P134）。高校は必履修の単位数等に変化なし（現代の国語2単位→現代の国語Ⅰ4新単位、言語文化2単位→言語文化Ⅰ4新単位）。選択科目は現行各4単位から、標準科目各8新単位・発展科目各4新単位へ（P80・P82）。新単位は1単位の学習量を17コマとしたもの。

5 生成AI・ICTとの付き合い方

6項目

1. 生成AI時代に「人間ならではの言葉の力」を
AIが言葉を大量につくり、SNSで簡単に発信できる時代だからこそ、言葉の意味を理解し、自分の考えを形にして表現し、他の人の経験や気持ちを理解する「人間ならではの言語能力」を育てるとされています。P128 P130 P140 資料編(1)P46 資料編(1)P139

2. AI要約をコピペする実態への対応
検索結果の一番上に出るAIの要約を、よく考えずにそのままコピーする実態が見られます。集めた情報が信頼できるか、妥当かを確かめたうえで、自分で考え・判断し・表現できるように指導することが重要とされています。P129

3. 生成AIを使う原則：ねらいに合うときに、出力も比べて吟味する
生成AIを含むICTは、発達段階をふまえ、授業のねらいに合うときに使うのが原則です。AIの出力も比べて吟味する対象であること、自分で考えた内容を自分の言葉で説明し責任を持つことを基本にします。P140

4. AIの使用に特に慎重であるべき場面
文章の全体をつかむための要約、最初の考えを文章にする活動、書くための構成を考えたり情報を選んだりする活動など、その単元で育てたい力に直結する場面では、AIを不用意に使うことに慎重であるべきだとされています。子供自身が行うべき考える・判断する・表現する過程がAIに置きかわらないよう特に注意します。P140

5. 評価は「情報を確かめて自分で考えたか」を重視
評価では、集めた情報の信頼性や妥当性を確かめたうえで、それを使って自分で考え・判断し・表現できているかという観点を、当面の基本的な考え方としてより重視するとされています。技術の進展による変化にも対応が必要とされています。P140

6. 語彙：AIの時代こそ実感のある言葉を
生成AIが発展する中、人間ならではの実感を伴った理解・思考・表現を支える語感を磨き、語彙を豊かにする学習を充実させるとされています。P136

6 今からできる準備チェックリスト

7項目

- [ ] 今すぐ 今の年間指導計画の単元を、「話や文章の機能」（仮称）の4つ（事実や知識の整理と理解／考えや主張の理由付けと吟味／思いや経験の表出と想像／協働による考えの深化や合意）で色分けし、領域をまたいでつなげられる単元の組（例：論説を読む・意見文を書く・提案のスピーチをする）を1組見つけて、続けて教えてみます。P131 P134 P139
- [ ] 今すぐ 要約する、最初の考えを書く、文章の構成を考えるなど、その単元で育てたい力に直結する場面では生成AIを使わせない、といった「使う場面・使わない場面」を教科会で話し合い、学年でそろえておきます。P140
- [ ] 今すぐ 単元計画に、途中で学習状況を見取って声をかける場面（形成的評価）を書き込み、単元末の知識だけのペーパーテストで評価を済ませていないかを点検します。P129 P142
- [ ] 告示まで 「知識及び技能」を、話す・書く・読む中で使って深めるもの（文章の構成、表現の仕方など）と、教養として深めるもの（言葉のきまり、古典、書写、読書など）に仕分け、前者は複数の単元を経てから、後者は単元末や学期末にまとめて評価する計画を1学期分試します。P131 P135 P142
- [ ] 告示まで 司書教諭・学校司書と相談し、読書のきっかけづくり（ブックトーク、読書会、ビブリオバトルなど）と、自分から読む読書へ移るための学習を年間計画に位置付けます。P129 P136 P141

- [ ] 告示まで 書写で評価する「文字を整えて書く力」と、ほかの学習で表現の手段として書く文字とを分けて評価の対象を確かめ、書字に困難のある子供にはデジタルの活用や代わりの方法を用意しておきます。P141

- [ ] 全面実施まで 教科書の「基幹教材」と「関連教材」の区別を見越し、同じ「話や文章の機能」の教材を束ねて、時数に応じて関連教材の扱いを増減できる単元計画の型を校内で作っておきます。P139

7 次期を先取りする授業アイデア

1本

中3　1単位時間（50分）

自分の要約と生成AIの要約、抜けたのはどこ？

要約はまず自分で。そのあと生成AIの要約を原文と照らして吟味し、確かめる目を育てます。

手順・ワークシート

ねらい

論説的な文章を自分で要約したうえで、生成AIの要約を原文と照らし合わせ、主張の取り違えや条件・根拠の抜け落ちを見つけて、情報の確かさを確かめる観点を自分の言葉で説明できる。

流れ

- 5分 本時の流れと約束を確かめます。「今日は、要約は自分の頭でする。生成AIの要約は、あとで点検する相手として出てくる」と伝え、端末は閉じておきます。
- 15分 生徒は原文を読み、段落ごとの役割（主張・根拠・具体例など）を余白にメモしてから、150字以内で要約します。先生は、主張と根拠、具体と抽象の関係に気を付けるよう声をかけて回ります。
- 5分 ペアで要約を読み合い、主張の言い表し方のちがいと、残した根拠のちがいを確かめます。
- 12分 先生がAIの要約2種類を配ります。生徒は「確かめる観点」カードを使って原文と照らし合わせ、ずれを見つけてワークシート右欄に段落番号と説明を書きます。最後に、自分の要約にも同じ観点を当てて直します。
- 8分 全体で共有します。「条件が落ちると主張がどう変わるか」「短くするほど何が消えやすいか」を話し合い、先生は確かめる観点を板書で整理します。AIの要約のよくできている点も確認します。
- 5分 振り返りとして、「検索結果の上にAIの要約が出たとき、自分はまず何を確かめるか」を2文で書きます。

評価

【知識・技能】情報の信頼性の確かめ方として、原文と照らし合わせる観点を使えているかを、ワークシート右欄で見取ります。【思考・判断・表現】自分の要約で、主張と根拠の関係を捉えられているかを見ます。この時間の要約は形成的評価に使い、つまずきに応じて次時に指導します。単元のまとめの評価は、端末を使わない場面で別の文章を要約・吟味させるなどして行います。

8 指導案（試案）

1本

中学校第2学年　国語　全6時間（本時は第3時）

意見文を書く ～反対の立場を想定して、根拠を吟味しよう～

中教審の審議まとめ（2026年10月5日）で示された、話や文章を「話や文章の機能」（仮称）で捉え直し、「論説を読む」「意見文を書く」「提案のスピーチをする」を「考えや主張の理由付けと吟味」（仮称）の学習として関連付けるという方向性と、情報の信頼性や妥当性を見極める力を系統的に育てるという方向性を先取…

指導案の全文

本時のねらい

反対の立場の意見を想定し、自分の根拠が適切かどうかを吟味しながら、意見と根拠、予想される反論への答えの関係がはっきりした構成メモを作ることができる。

本時の流れ

- 5分 **導入** 前時の材料カードを見返す。第1時の意見文の例で「反対の立場の人なら納得しない」と指摘した点を思い出し、本時のめあてを確かめる。
- 8分 **展開** 自分の意見（賛成・反対など）を一文で書き、それを支える材料カードを2～3枚選んで、なぜその材料が根拠になるのかを書き添える（個人）。
- 12分 **展開** 【反論役ペア】ペアの相手に自分の意見と根拠を説明し、相手は反対の立場から質問や反論を二つ以上出す（3分ずつ交代）。出された質問や反論は、相手に付箋に書いてもらい、自分のワークシートに貼る。
- 12分 **展開** 出された反論をもとに根拠を吟味する。①根拠を「事実か意見か」「出どころは確かか」「主張とつながっているか」の3点で確かめ、弱い根拠は差し替える。②反論の中から一つを選び、どう答えるか（一部を認めたうえで別の根拠を示す、条件を付ける など）を決める。③「意見→根拠→予想される反論と答え→まとめ」の順に、段落ごとの構成メモを作る。
- 6分 **展開** 2～3人の構成メモを大型提示装置で紹介し、反論への答え方の工夫を全体で確かめる。
- 7分 **まとめ** 構成メモを見直して必要なら直す。振り返りシートに「反論を聞いて変えたところと、その理由」を書き、次時に意見文を書く見通しをもつ。

PDF版：shidoan-chu2-kokugo-hanron-iken.pdf（ダウンロードコーナー）

9 現行の学習指導要領・解説（中学校）

PDF **中学校学習指導要領（平成29年告示）（本文）**
https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_02.pdf

PDF **中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編**
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_002.pdf

文部科学省の公式PDFです（クリックで開けます）。

ご利用について

- **研修・会議・授業・保護者会での印刷・コピー・配布・投影はご自由にどうぞ。ご連絡は不要です。**
  （校内研修・教育委員会の研修・教員養成の授業・学年会・PTAなど）
- クレジット「原田英語.com 次期学習指導要領ナビ」
  （https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/）はそのまま残してください。
  各ページの下に入っています。
- 中身は中央教育審議会 教育課程部会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」（2026年10月5日）ほか文部科学省の資料をもとに、原田英語.comが要約したものです。**告示前の方向性**で、答申・告示で変わることがあります。（仮称）の名前も今後変わる可能性があります。
- 文中の P○ は審議まとめ本体（PDF）のページ、**資料編（1）～（3）P○** は第3部 資料編（PDF）のページです（PDFのページ番号。印刷されたページ番号とは1つずれることがあります）。PDFで見ているときはクリックで原文が開きます。
- 授業アイデア・指導案は、審議まとめの方向性をふまえた原田英語.comのオリジナルの試案です。
- 最新の情報・ほかのPDFはサイトで：
  https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/download/（2026年11月4日 版）

サイトで最新版を見る